

博士論文の要約

氏名 查斯 查干

論文題目 オイラド・モンゴルにおける口頭伝承とアイデンティティ
—故郷創出物語から—

本研究では、新疆ウイグル自治区ホボクサイル・モンゴル自治県に居住するオイラド・モンゴルの一系統であるトルグドという民族集団を対象とし、「帰還」という過去の出来事を彼らにとっての真実として語り伝える口頭伝承をストーリー性とメッセージ性という二つの側面から分析し、困難な歴史的・社会的現実のなかで集団的アイデンティティを保持し続けるトルグドの実践を明らかにした。

トルグドは、オイラドの内争を避けて 1630 年代に中央アジアのタルバガタイ山脈からロシアのヴォルガ河周辺へ移住したが、1771 年に現在の新疆に当る領域に帰還した集団である。その子孫たちは今日も、この「帰還の記憶」を多様な表現によって語り継いでいる。ロシアの地で 140 年も過ごしてから東方へ帰還したトルグドにとって、ジュンガル帝国崩壊後の空白の地は新天地であり、彼らはそこに安住の権利を獲得しなければならなかった。そこで、チベットに赴いて宗教的権威から承諾を得ると同時に、北京へ赴いて政治的権威から許可を得て、安住の権利を獲得することによって「故郷を創出」していった。トルグドの帰還に関する口頭伝承や関連する儀礼は、こうした彼らの故郷創出の歴史を伝える物語である。

本論文は、8 章からなり、以下のように議論を進めた。

第 1 章では、トルグドの帰還をめぐる歴史研究およびオイラド・モンゴルの歴史研究と、口頭伝承に関する人類学的研究において本研究を位置づけた。

第 2 章では、本論文の調査対象であるトルグドの帰還に関する歴史的背景と、調査地であるホボクサイル・モンゴル自治県の概況および、現地における調査について解説した。

第 3 章では、架空の英雄人物アーニ・バルダンを主人公とする物語と民謡を扱った。それはロシアの追撃から逃れて移動するトルグドに必要な「しんがり」をアーニ・バルダンという架空の人物に託し、道中に経験した艱難辛苦を強調する口頭伝承群である。アーニ・バルダンの物語と民謡の分析から、以下のことが明らかとなった。まず歴史的事実を超えて、トルグドにとって心情的に真実であると感じられる帰還のプロセスを語るストーリーと、彼らの移動は艱難辛苦に満ちていたという心情を伝えるメッセージが物語に含まれていた。そして、物語のストーリーとメッセージが一致して、トルグドの帰還途中での苦労を共に乗り越えたという心情を表しているため、トルグドがアーニ・バルダンの口頭伝承群を語り継ぐことによって、帰還集団としてのアイデンティティを強化した。

第 4 章では、サンドグという架空の人物が、トルグドの帰還直後にチベットから主尊を

招来する顛末を語る物語を扱った。トルグド帰還以前の時代のサンドグ物語を加えることで、このサンドグは、人びとに宗教的権威からの許諾をもたらすという恩恵を与えるにもかかわらず、宗教的権威に対して常に対抗的であり、その結果、自らの死を招くという正負の役割を兼ねるトリックスター的性格が明らかになった。口頭伝承のなかで、サンドグは敬虔な仏教徒であるにも関わらず、そのような宗教的権威に対してトリックスターとして対抗的性格を発揮しており、人びとはそうした性格を愛し、物語を享受してきた。サンドグの物語に対する分析からは、宗教的権威を招来するプロセスを語るストーリーと、そこに埋め込まれたメッセージすなわち宗教的権威への抵抗は一致せず、さらに現在、この宗教的権威の傘下にあるにも関わらず、隠れた優越観が含まれていることが明らかになった。

第5章では、ホボクサイル・トルグドの領主であるツェヴッドルジ親王という実在の人物を主人公とする物語を扱った。領主のツェヴッドルジが北京へ行き、清朝皇帝へ謁見したことは実際にあった史実であり、一般に、清朝からの朝貢に対する恩恵とみなされる。しかし、この出来事を、トルグド自体は必ずしも清朝からの恩恵とはみなしていない。物語では、ツェヴッドルジが知恵を使って王印を取ってきたプロセスに、清朝皇帝の愚かさへの諷刺が埋め込まれていると同時に親王へも諷刺が向けられている。ツェヴッドルジの物語に対する分析からは、トルグドが清朝から親王の印を招来してホボクサイルで遊牧する権利を得る過程が伝えられる物語のストーリーと、外来の政治的権威への対抗心や自集団の政治的権威に対する揶揄というメッセージを読み取ることができた。このように、物語のストーリーと、そこに付加されたメッセージは必ずしも一致しない。このことは、清朝が与えた政治的体制を抜きにして、トルグドが集団アイデンティティを獲得していることを示している。

第6章では、トルグドの帰還途中でしんがりの役を果たしたアーニ・バルダンの魂がトルグドの人びとと共にホボクサイルへ到着したが、もともとホボクサイルを占めていたとされるカザフの守護神を追い出したので、そのカザフ守護神が災いをもたらすことを防ぐために供犠をおこなうようになった、という黒山羊祭の起源に関する口頭伝承を扱った。黒山羊祭の起源に関する語りは多く存在するものの、それらの語りはすべてカザフの守護神をめぐるものであり、それに対する畏怖と慰撫の心情が表れている。黒山羊祭に関する物語の分析から、物語には現在のカザフに囲まれて生活する社会現状が反映され、現状が帰還当時にカザフがまだいなかった事実置き換えられて真実となっているストーリーがみてとれた。ストーリーが現状を反映しているからこそ、周辺民族に対する位置づけとしての集団アイデンティティの確認になっているのである。

第7章では、近年、新疆において、国家機関職員と彼らの出身民族と異なる民族の家族とを親戚として結ぶ「結親」政策が導入された後、黒山羊祭に関する物語が変化しつつある現状を扱った。その結果、黒山羊祭の語りのストーリーは、国家の公式な言説や社会的・政治的情勢に対応しながら今も改変されつつあることが明らかになった。

第8章では、本論文の内容を要約したうえで、トルグドの帰還を語る口頭伝承について考察し、以下のことを明らかにした。(1)「トルグドの帰還」という出来事が国家の公式な歴

史に肯定されているため、帰還をめぐる口頭伝承が語りの場を保持できている。(2) 帰還を語る口頭伝承は帰還のプロセスを伝えるストーリー性と、ストーリーの陰に埋め込まれたメッセージをも携えている。(3) 物語のストーリー性が現実を反映し、支配的言説に柔軟に応じる側面を持つ。(4) 操作可能なストーリー性と操作不可能なメッセージ性を持つ口頭伝承を語り継ぐことによって、トルグドは社会的、歴史的な現実を生き、集団的アイデンティティを強化している。

本論文の意義は、従来行われたことのなかったロシアから中国へ帰還してきたトルグド集団のさまざまな口頭伝承を初めて収集し、その資料から口頭伝承による集団アイデンティティ構築の具体的な様相を示したことである。